高等教育研究センター
# かわらばん
秋号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第24号

## 大学の垣根をこえて
# 「FD・SDコンソーシアム名古屋」が発足しました

教員集団の資質向上の取り組み（ファカルティ・ディベロップメント、FD）や、職員集団の資質向上の取り組み（スタッフ・ディベロップメント、SD）に好ましい印象を持つ教職員は多くないかもしれません。理由はさまざまでしょうが、お仕着せの講演会やワークショップの氾濫は、原因のひとつのように思われます。いっぽう、真の資質向上をめざすならば、当事者による主体的な活動が欠かせないはずです。とはいえ、新しい活動を始めるには、人的、資金的な裏づけも必要です。

「FD・SDコンソーシアム名古屋」はこのような状況を受けて誕生しました。名古屋大学が、中京大学、南山大学、名城大学と共同で、FDやSDを実施し、大学の改革・改善を進めることを目的としています。おなじ地域にある複数大学がコンソーシアムを組むことは珍しくなくなりましたが、FD・SDに特化した取り組みはいまだ先駆的なものです。今年度からFDの実施が各大学の義務とされたことを受け、実施のためのリソースを共有できるコンソーシアムという形態に注目と期待が集まるなかでの発足となりました。

まだ発足したばかりのコンソーシアムですが、大学教員準備プログラムや、海外研修への派遣をさっそく実施したほか、哲学教育研究会、名古屋経済学教育研究会、なごや科学リテラシーフォーラムといった、教職員有志による活動への支援も始めました。これからさらに支援の範囲を広げ、活動を軌道に乗せてゆくお手伝いをしてゆきます。活動企画をお持ちの方は、info@cshe.nagoya-u.ac.jpまでご連絡ください。皆さんのニーズにあった活動のご提案をお待ちしております。

### FD・SDコンソーシアム名古屋　今後の活動の一例

| | |
|---|---|
| 11月 5 日(水) | セミナー「コラボレーションを実現する教員･職員関係論」 |
| 11月18日(火) | 教務学生事務担当職員研修 |
| 11月28日(金) | 哲学教育研究会第3回セミナー |
| 12月 8 日(月) | セミナー「大学職員の能力開発をいかにすすめるか」 |
| 2009年 3月 7 日(土) | 大学教育改革フォーラムin東海 |

コンソーシアムの活動詳細は、ホームページ（http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/consort/）にてご覧いただけます。

### 哲学教育研究会主催公開セミナー

2008の第1回を、哲学教育とは縁もないのに「鑑賞」してきました。内容は、哲学以外の教科も教える高専教員がアイデンティティ・クライシス(?)を乗り越えた体験談、そして、「知を愛する」あまりに学生の反応に右往左往する哲学科教員の奮戦記。哲学の授業というと、ボソボソと昔の哲学者の言葉をなぞっているイメージ（関係者の皆さま、ごめんなさい）がありましたが、現実はだいぶ違っていることに驚きました。じつは当の哲学者たちも、こんな話はしたことがなかったそうです。閉会のあと懇親会になだれこんで、深夜まで哲学教育について語りあったと聞きました。今後どのような展開を見せるのか、目が離せなくなりました。

残暑も和らいできた9月も末の土曜の昼下がり、名城大学で開催された、**第1回科学リテラシー講演会・実験指導者講習会**を覗いてきました。「なぜ今すべての人に科学リテラシーが必要なのか」と題した講演会に続き、講習会では、子ども向けの実験教室で使えるような「ネタ」が披露されました。学生たちが初々しく指導者役を体験するなか、製作したのは、猫が背を丸めたり伸ばしたりする動くおもちゃ、紙製ブーメラン、ペットボトルと球形ビーズを使った光学顕微鏡、この3点です。ブーメランの飛行原理の説明方法について、議論が盛り上がりかけたところで時間切れになってしまったのが、ちょっと惜しまれましたが、老若問わず意見を述べあう、和やかな会でした。今後、名古屋地域のさまざまな科学コミュニケーション活動に携わる人たちの交流の場へと広がってゆくと良いのかな、などと思いました。

## 「大学教員をめざす君へ」を開催しました

2008 年度大学教員準備プログラム「大学教員をめざす君へ」を、9月 17 日（水）・18 日（木）の２日間にわたって東山キャンパス全学教育棟で実施しました。教職員の皆さまには広報にご協力いただき、ありがとうございました。おかげさまで大学院生やポスドク 36 名が集まり、すべてのセッションに参加した人には、センター長から修了証を授与して、閉会となりました。今年は、コンソーシアム事業に参加している他大学からも参加者があったほか、初めて外部講師をお招きしたり、春に刊行した『英語で教える秘訣』の内容を取り入れたりと、スタッフにとっても新鮮味のある２日間となりました。参加者からのコメントも参考に、来年に向けてプログラムを発展させたいと思っています。

グループワーク

講義風景

**かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください**

# ワシントン大学におけるTAトレーニング

ジョディ・D・ナイキスト（客員教授／ワシントン大学）

米国における大学院生TAのトレーニングは、日本のものとは大きく異なることを、ご存知でしょうか？　米国のTAには、将来の職に備えて、教える技術を習得することが不可欠とされているためです。米国の修士号取得者は、研究を遂行する能力とともに、効果的に教える能力が求められているのです。大学でいえば、授業や、大学院生の指導があります。企業、政府、NPOなどでは、部下を教えること、上司に自分が何を達成しようとしているのかを説明することが必要です。教えることは、学校や大学という枠を超えて、社会のいたるところで必要とされ、実施されているのです。とくに、指導者の立場につくことが期待される修士号取得者は、教えることに熟達している必要があると考えられています。

ワシントン大学におけるTAトレーニングは、TAと彼らの指導教員、研究科、そして教授開発研究センターを巻き込んだ、多面的なプロセスで構成されています。基本的には、研究科の主導により、オリエンテーション、注意深い指導のもとでの少人数授業、教員の指導下での授業実践、という3つの段階が用意されます。このプロセスを順次経験することにより、「年長の学生」だった大学院生TAは、「教員見習い」を経て、「若手の同僚教員」へと変容してゆくのです。

オリエンテーションは、秋学期開講の約2週間前に実施されます。初日、TAは自分の研究科に集まり、その後、教授開発研究センターによる2日間のTA教授学習カンファレンスに参加します。このカンファレンスのユニークなところは、すべてのセッションがTAまたは教員によって企画されているということです。そして、各TAが参加すべきセッションは、彼らの所属する研究科によって推薦されています。こうして、各研究科とその研究科のTAが参加するカンファレンスが成立するのです。

オリエンテーションに続いて、TAたちは自分の研究科に戻り、討議のリード、研究室における指導、講義、コース設計などを担当してゆきます。彼らが教えるときには、教員や教授開発研究センターのコンサルタントが観察し、適切なフィードバックを与えます。ワシントン大学では、この方法が、TAが教授学習に関する能力と知識を身につけ、将来に備えることを保証する、最善の方法であると考えています。（翻訳　安田淳一郎）

## Curriculum Glossary
### ―― カリキュラムにまつわる用語集 ――

## サービスラーニング
## Service Learning

大学教育における体験的な学習の一つとして、サービスラーニングという形態があります。サービスラーニングには多様な定義がありますが、中央教育審議会の答申では、「社会の要請に対応した社会貢献活動に学生が実際に参加することを通じて，体験的に学習するとともに，社会に対する責任感等を養う教育方法」と定義されています。サービスラーニングの具体的な内容としては、市役所、児童保育施設、農業施設、海外のNGOにおいて業務を体験する実践過程と、その実践過程を挟む事前学習と事後学習から構成されます。特にサービスラーニングでは、事後学習において体験をふりかえり学習効果を高める作業が重視されています。

このようなサービスラーニングは、1980年代からアメリカの多くの大学で導入され、1100以上の大学から構成されるキャンパスコンパクトというサービスラーニングを推進する全米組織も設立されています。日本においても、サービスラーニングを企画・実施するためのセンターや部署を立ち上げる大学が増えてきました。初期の頃は、大学のミッションとしてサービスを重視するキリスト教系の大学において、サービスラーニングが導入される事例が多かったようですが、近頃では日本のさまざまな大学において導入されています。

名古屋大学においても、現在のカリキュラムの中にすでに体験的な学習を含む学部や大学院は多数見られます。体験的な学習は、単に専門分野の知識やスキルを得るだけでなく、コミュニケーションの能力を高めたり、学生自身のキャリアを考えたりする機会にもなるため、カリキュラムにおける位置づけ、他の授業との関連、評価の方法などを考慮する必要があります。現在実施されている体験的な学習の質を高めるために、サービスラーニングという枠組みで捉え直してみてはいかがでしょうか。　（中井俊樹）

## 読んでおきたいこの1冊
Great Books on University

東京大学 大学経営・政策研究センター編

## 『全国大学生調査　第１次報告書』

2008年5月　（http://daikei.p.u-tokyo.ac.jp/）

大学教員の通弊として、ついつい「今どきの大学生は」と口走ってしまう。しかし、教職員だからといって、学生のことをよく知っているとは限らない。自分の学生時代のイメージにとらわれていることも多い。本報告は、日本の大学生に関する調査としては最新かつ最大規模のものである。全国の国公私立大学127校288学部の48,000人余の大学生から回答を得ている。この元データと報告書はウェブ上に掲載されているので、誰でもダウンロードして加工・活用できる、いわば「公共財」である。調査結果からは、とくにベテラン・中堅層の教職員にとっては驚くべき事実を窺い知ることができる。

「8割以上の学生は、興味がわかない授業でもまじめに出席する」「約８割の学生は授業で出席を重視してほしいと考えている」「7割以上の学生は授業の中で必要なことはすべて取り扱ってほしいと思っている」「約３割の学生は、１ヶ月にまったく本を読まない」こうした結果は何を物語るのだろう。今どきの大学生はまるで高校生のように習慣的に教室にやってくるが、だからといって主体的に手や頭を働かせているわけではない。そして高校までのように、手取り足取りわかりやすく教えてほしいと思っている、といったところか。まさに、「大学たるもの、興味ある授業だけ取捨選択して出席する」文化に育った旧世代からみれば、隔世の感である。だからといって、学生に対する過剰サービスもいかがなものかと思う。大学人たるもの、まずは大学とはそもそもどういうところなのかを彼らにきちんと説明すべきではないか。

本データ・報告書は、学務や学生支援に携わる大学職員にとっては必見である。また、同センターが実施している『高校生の進路追跡調査』からは、高校生とその保護者の意識を併せて知ることができる。

（近田政博）


**高等教育研究センタースタッフ**（2008年10月現在）

センター長　戸田山和久
専門領域：科学哲学
教授　夏目達也
専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授　近田政博
専門領域：比較高等教育学、初年次教育
准教授　中井俊樹
専門領域：大学教授法、高等教育マネジメント
助教　齋藤芳子
専門領域：科学技術社会論

特任講師　安田淳一郎
研究員　久保田祐歌

＜平成20年度　海外客員＞
施暁光　（中国・北京大学）
ジョディ・ナイキスト　（米国・ワシントン大学）

＜平成20年度　国内客員＞
佐藤浩章　（愛媛大学）
米澤彰純　（東北大学）
舘　昭　（桜美林大学）

名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695
E-mail　info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL　http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/


『かわらばん』名古屋大学高等教育研究センター　ニューズレター秋号（第24号）2008年10月発行
編集長　戸田山 和久　編集幹事　齋藤 芳子